NPO 日本デザイン協会事業報告

描いてみて学ぶ、伝達表現　―案内図を作ってみる―

開催日時　平成 26 年 5 月 14 日 AM10:00～12:15

開催場所　当協会本部事務局

参　加　者　宮城県七ヶ浜中学3年生（生徒５名）

引　率　校長･遠藤 勝則 先生、教諭･赤塚 映子 先生

ＪＤＡ 秋山修治、大倉冨美雄、勝井三雄、木村戰太郎

ここ数年交流のある宮城県七ヶ浜中学校生徒の、将来、デザインや建築系と思われる方向へ進路を希望する生徒に、「デザインについてのあらゆることを考える」という講義を年数重ねてきました。今年は、これまでの（希望アンケートなどを取って対応してきた）やり方を変えて、生徒が参加出来るような形態と、デザインに最も必要な｢伝える｣をテーマにしようということになり、「自宅から通う学校までの道のりを、状況を知らない人（つまり地元を知らない当協会の会員諸氏などに対して）に案内する」というテーマで進められました。

参加者へのオリエンテーション

特に、アイデアを出し熱のこもった意見を頂いた勝井会員が軸になることによって、当日の研修が進みました。「何を、どのように表現するか」については、生徒諸君に「同世代でも、親の職業や生活習慣、環境の違いでそれぞれの認識の違いがあり意味があるので、それがそのまま出るように」求めました。そのためには「思うままに描けばよい」と指示され、最初に、まず各自が記憶している世界地図を簡略表現するなど、中間コメントを含め１時間半ばかり進められました。

その結果、個性に満ちた「地図」が出来上がりました。「ぜひ見せたいものを記載する」ような観光案内的なものではなく「自分の目に留まり記憶された場所」の表記が多かったこと、距離やスケールについて第三者が理解しにくいこと、坂道の多い場所の特性表示が難しいこと（実体空間の表現方法をまだ学んでいない）、学校と自宅、通学路などの識別表現への眼差しの不十分（地図の機能をあまり意識しない）、などが観察されました。これらは説明、質疑という形で、生徒各個人との対話がなされました。その結果 5 人の出来上がった図を、学校を中心にして最後に重ね合わせることではじめて周辺環境、地形の高低差や方位が理解でき、そこから共通項目である、距離、方位、縮尺、通学時間、ランドマークの統一などの必要なことを理解し、それらの「共通点を見つけ、表現することから始めなければならない」という原理を感じて貰えたと思います。また地図を通じて生徒自身が、それぞれに社会とつながる視野を持ってもらえたのでは、と思います。

勝井氏による課題概要解説

引き続き、｢地図｣の成り立ちについて講義がありました。

原初的なものとして、マーシャル群島の住民に使われていた「航海用『小枝編み』地図」や、「イヌイット（仮説）の木片地図」などが紹介され、それが序々に視覚的な平面表記に変わっていき、「絵解き説明地図」になって行ったようです。それは「俯瞰絵図」となり（「ローマの都市図」1638 や「洛中洛外図」屏風 1565 など）、現代でも使われています（ヘルマン・ボルマンの「マンハッタン地図」や「新宿副都心の歩行者用案内図」など）。一方、伊能忠敬が作成したような精度のある「地図」も発達すると、これらの上に線路図などを記入したサブ機能が主役になる「アイコン地図」とでも言えそうな分野も発展してきました。それらはさらに実際の地図上の位置を概念化し、駅順や乗り換え地点などの機能を優先させる「地図」にまで洗練されることになってきたのです。

このように、地図が求められる機能によって表現が視覚的に（ビジュアルに）変化することを勝井会員は教えようとしたのです。

これらへの質問や講評を経て終わり、続いて木村会員からプリント資料により、前もって質問のあったデザインという職業にまつわる質問に答える、という講義が行われました。この際に、秋山会員の作成してくれたデザイン分野についての分類図も活かされました。　以上

講評を受ける参加者

真剣に思い巡らす参加生徒